すばるのほし　～子犬系ＪＫ妹キャラにたっぷり愛されちゃう百合音声～

作者名：新條　にいな
Mail: niinashinjou@gmail.com
Twitter:niinashinjou
Blog: http://blog.livedoor.jp/niinashinjou/

1・　綾瀬すばるの家・玄関　午後7時・内

主人公、すばるがひとり暮らしするマンションへ到着する。
オートロックのインターホンで名前を告げ、すばるの部屋の前までたどり着いたところから物語がスタートする。

【1．お出迎えといっしょにお祝い】

ＳＥ：ピンポーン、とチャイムを押す音
ＳＥ：即座に鍵が開く音

すばる、チャイムが鳴ったら即座にドアを開けられるよう、玄関で待機していた。
そのため、チャイムを鳴らすと間髪を入れず出てくる。

「おかえりなさい！　お姉ちゃん。今日も一日おつかれさま。
遅い時間まで、いっぱい、いっぱい頑張ったね？　いいこ、いいこ。
えー？　別に一緒に住んでないって？
いいじゃん。会いに来てくれる日は、新婚さんみたくしたいの！
……ていうか、電話くれたら駅までお迎え行ったのに……。
外、雨降ってたでしょう。濡れなかった？
上着ちょうだい！　かけておくね」

ＳＥ：廊下を歩く音

２人、部屋の中へ入っていく。

「お姉ちゃん！　今日は何の日だか、もちろん覚えてるよね？」

主人公、「もちろん」と答える。
右手を小さく上げ、インターホンのカメラに映らないよう隠し持っていた、ケーキの入った箱を見せる。
すばる、箱に書かれた店名から、自分の好きなケーキが入っていると察する。

「【ケーキにはまだ気づいていない】うん、うん。それでこそわたしのお姉ちゃん……。
【ケーキに気づき】あぁ！　ケーキだ！
すばるの好きなチーズケーキ……？

嬉しい……本当に、ちゃんと覚えててくれたんだね。ありがとう。
そうだよ。今日は、お姉ちゃんとわたしがお付き合いし始めて、ちょうど1年の日。
だから今日はね、夕ご飯にお姉ちゃんの好きな食べ物、みんな作ったんだ。
たっくさん、たっくさんあるから……いっぱい食べてね。
【言いづらそうに声が小さくなり】……それで、買ってきてもらっちゃったけど……。
実は、ケーキも焼きました。
わたしが作ったのも食べてくれる……？」

主人公「もちろん、すばるの作ったケーキから先に食べるよ」と答え、すばるの髪を撫でる。

「ありがとう！　お姉ちゃん、大好き！
ふふふ……だーい好き。
今回はね、前、一緒にケーキ食べに行った時、お姉ちゃんが『おいしい』って言ってたのと同じやつを作ってみたんだ。
友達にも食べてもらって練習したから……。
きっと、おいしいと思……んっ」

主人公、すばるの髪を撫でていた手で頭を引き寄せ、唇にキスをする。
すばる、慣れた雰囲気でキスに応える。
最初は浅く何度も重ねる。

「ん……ふ……んっ。ちゅっ。ちゅっ、ちゅっ。ちゅっ。ぁ……ちゅっ。
【一度離れて。からかうように】……お姉ちゃん、えっちだー。
そんなにわたしに会いたかったの？
……わたしは、会いたかったよ。お姉ちゃん、忙しいからさ……。
電話とか、ラインとかで……お話はほとんど毎日してたから。淋しくはなかったけど……。
本当は、早く、早く今日にならないかなって思ってたの。
ね。もっかいちゅーして……？
んっ。ん……ちゅっ、ちゅぱっ。
うれしい。お姉ちゃん、好き……。
ねえ。今日はもう、ずっとすばるのこと離さないでね。
うん。ちょっとでも離れちゃやだよ。
お風呂もお布団も、ずーっと一緒だよ。
そうだな……お手洗いもついてっちゃおっかな？
……えへへ、冗談、冗談」

ＳＥ：足音

２人、居間に入る。食事の準備はもう済んでいる。

「それでは、お姉ちゃんとわたしの、お付き合い１周年を記念して、今日はお祝いです！
わーい！ぱちぱちぱちぱち……」

すばる、口で「ぱちぱち」と言った後に手でも拍手する。小刻みに大きな音で。

「ということで、はいっ、お姉ちゃんのお飲み物はこれ！
友達がね『これおいしいよ』って教えてくれたんだ。
【念を押すように】全部飲んでね。
それからケーキ！
はい、あーんして……」

主人公「おいしい。この前のお店のより、すばるが作ったケーキの方が好きだな」と心から誉める。

「【ひときわテンション高く】おいしい！？　やったあ！
ねえねえ、ご飯もケーキも全部、すばるが食べさせてあげよっか？
それじゃあ時間がかかるから、冷めちゃう？
……あ、そっか。ざぁんねん。
【少し残念そうな声で】じゃあ、いただきまーす。
【咀嚼音】もぐもぐもぐ……。
そっちもおいしい？　ありがとー。
あのね。わたし、お姉ちゃんがご飯食べてるとこ見るの、大好き。
毎日作ってあげるひとになりたいな……って思ってるよ。
あ、それってお姉ちゃんのお母さん？
いいなあ。それ。すばる、お姉ちゃんのお母さんになる！
ようし。お姉ちゃん。今すぐ赤ちゃんに戻っていいよ。
すばるがお姉ちゃんを産んで、育てるから。
あっでも、そしたらお姉ちゃん、お姉ちゃんじゃなくなっちゃうね。
えっ……何より……それじゃ結婚できないって？
【一瞬驚いて静かになり、その後、嬉しさを噛みしめるように真面目な調子で】うん……そうだね。わたしは、お姉ちゃんのお嫁さんになるんだもんね。
【満足げに】ふふふ……。婚約者……だもんね」

すばる、嬉しそうに笑った後、少し黙る。
数秒沈黙の後、ドキドキと緊張した雰囲気で話し始める。

「【少し間を置いた後、ドキドキと緊張した面持ちで】ねえ、お姉ちゃん。
お嫁さん、って言えばさ。
初めてキスした日のこと、覚えてる……？
あの時はすばる、まだ幼稚園だったよね。
お姉ちゃんのおうちで、一緒にテレビ見ててさ……。
ドラマかなにかだったかな。
『くちびるとくちびるのキスは、一番好きな人としかしないんだよ』ってセリフ、聞いてさ。
そしたらお姉ちゃんが『じゃあ、私はすばるとしたいな』って言ってくれて。
それで、お母さんたちに見つからないように、何回も、何回もキスしたよね。
あの時すばる、本当にうれしかったんだよ。
……すばるも、おんなじ気持ちだったから。
あの日からずっと、わたしの夢は、お姉ちゃんのお嫁さんになること。
すばるがくちびるにキスしてほしい人は、一生、お姉ちゃんだけ。
だから勉強も頑張れたし……。
わたしが中1で遠くに引っ越すことになった後も、こうして戻ってくることができたの。
だいたいさ。こんなのお姉ちゃんがいなかったら絶対無理だったよ？
『すばるにはレベル高すぎる』って言われてた学校受験して受かって。
1人暮らしまでするようになってさ！
お姉ちゃんがいるから、勉強も、お料理も、ちゃんとできるようになったの。
お姉ちゃんがわたしを素敵にしてくれるんだ。
好きだよ、お姉ちゃん」

すばる、自分から顔を寄せ、主人公の唇に軽くキスする。

「ちゅ。……あれ、お姉ちゃん。なんかお目々とろんとしてる。
【期待した雰囲気で、ささやくように】もしかして、もうお薬効いてきちゃった……？
【しまった、言ってしまった、という感じで】……あ。
【慌てて取り繕うように早口で】ええっと、あの、お薬っていうのはね。
あのお飲み物。お薬みたいな紫色してたでしょって意味！」

主人公「私が飲んだのは赤色。紫色の飲み物を飲んだのはすばるだよ」と冷静に説明する。

「え？　赤かった？　紫の飲んでたのはすばる？
嘘。絶対紫だってば。
だってちゃんと紫の『えっちになるお薬』の方。
【ちらりと自分のグラスを見て、紫であるのに気づき、一瞬間を置いて】……わたしが飲んでた」

主人公、「『えっちになるお薬』ってなに？」と聞く。
あきれたように、しかし、怒ってはいない。

「【主人公の言葉が耳に入っていない】うそぉ……。
【主人公に質問されていることに気づき、慌てて取り繕う】あー、えーっと。その、ね？
【言い訳を考え、数秒、間を置く。それから、観念したように】……ごめんなさい！
この前友達がくれた、飲んだらえっちな気分になるお薬、お姉ちゃんに飲ませようとしました……。
だって、お姉ちゃん、もうすばるといっぱいキスしてるし、たまにすばるのおっぱいだって触るくせに……。
『お嫁にもらうまで、えっちはしない』とか言うから。
みんなに『そんなの変だよ』とか『だったらすばるが誘っちゃいなよ』とか言われて、つい。
【言い訳してはいけないと考え、反省し真面目な口調で】……ううん、きっかけはそうでも、友達のせいじゃないね……。
わたしが、お姉ちゃんとしたいって思ったから、お薬持ってきたの。
【自分のしたことの重大さに気づき、泣きそうな声で】でも、やっぱりおかしいよね。ごめんなさい。
せっかく大事な日なのに、お姉ちゃんの気持ち操るようなことしてごめんなさい。
お姉ちゃん、今日は帰って。
お薬いつ効いてくるかわかんないけど……。
このまま一緒にいたら、すばる、お姉ちゃんになんか変なことしちゃうかもしれないし……。
ごめんね。お祝いはまた……えっ？」

主人公「よく正直に話してくれたね」と言い、すばるを抱き寄せる。
背中をとんとんしてあげながら、すばるを抱きしめる。

ＳＥ：ぽんぽん、と背中をとんとんする音

「え……？　お姉ちゃん、怒ってないの……？
わたし、お姉ちゃんに良くないもの飲ませようとしたのに……。なんで？

帰らないで、居てくれるの？　ほんとう？
わたしのこと、許してくれるの？」

主人公「もちろんだよ。私の方こそ、すばるを不安にさせてたなんて知らなかった。本当にごめんね。許してくれる？」とすばるに微笑みかける。

「【心底すまなそうに】あ……違うの！　お姉ちゃんが謝ることなんてなんにもないの。
わたしが勝手に、さみしくて。
お姉ちゃんが本当にすばると結婚したいって思っててくれて。
『私たちの関係をお父さんやお母さんに認めてもらうためにも、結婚の承諾をもらうまでは、真面目なお付き合いをしようね』
って言ってくれて……。
すばるのこと本当に大事にしてくれてるんだって、わかってたの。
なのにすばるが、勝手に、その。
【言いづらそうに小声で】えっち、したいって思っただけで……。
確かに、えっちしてないっていうのは、ちょっと……不安だったけど……。お姉ちゃんが悪いことなんて何にもないの！」

主人公、優しくすばるに笑いかける。
主人公「えっちしよっか。すばる。息荒くしてる、可愛いすばる見てたら、私もえっちしたくなっちゃった」と言う。

「え！？
【困ったように】い、息、荒くなんかなってないよ……。
あんなお薬、絶対、絶対ニセモノだもん。
お姉ちゃん、無理しないで……。
ていうか、えっち！」

【2．お姉ちゃんからの幸せなおっぱい愛撫と、すばるからえっちのおねだり】

主人公「えっちなのはすばるの方でしょう？」と、優しく正面からすばるを見つめる。
そのまま、むにゅ、と左右のおっぱいを揉む。

「【嬉しそうに】あっ……。
やぁだぁ、お姉ちゃん、もみもみやだぁっ……。
ぁっ。んっ……ぁ、そんなの、されたら、すばる……」

主人公「されたらどうなっちゃうの？」と聞き「あっちを向いて」と囁く。
すばるに反対方向を向かせ、今度は後ろから抱きしめておっぱいを両手でしっかり包んで揉む。
すばる、おっぱいならこれまでに何度か揉まれているので、少しも抵抗せず素直に腕の中に収まっている。

「ぁっ、は……はぁ……はぁ……ぁっ……！
や、やらしい子になっちゃうぅっ……。
【耳をぺろりとそっと舐められ】ひゃんっ！　ぁ、お耳も、だめぇっ……ぁぁっ……。
【泣きそうな声で】ぺろぺろしないでぇ……すばるっ、お薬飲んじゃったんだよ？
だから。
【ひときわ感じた声で】ぁぁっ……」

主人公「すばるの好きなのしよう？」と言い、すばるの服の中に手を入れ、ブラジャーのホックを外す。
そのままブラジャーの下に手を滑り込ませる形で、生のおっぱいを揉み始める。ずはるは、こうして触ってもらうのが好き。

「【困っているのを装うが、内心は完全によろこんでいる声で】ぁっ、や、お姉ちゃんっ。
ブラ、はずしちゃだめだよぉ……。
もぉ、じかに、さわっちゃっ……。
ぁ、あっ、あっ。ぁぁん。
え？　服の中に手ぇ入れられるの、す、ぁっ。
【「好きじゃない」と一度は否定しようとするが】……うぅ……ぁぁんっ……。好きっ……
好きですっ……。
【観念して】だって。お姉ちゃんのお手々がすばるの服の中にあるの、すごくドキドキするんだもんっ……」

主人公、すばるの身体をしっかり抱きしめたまま、たっぷりとおっぱいを揉みしだく。
すばる、なすすべもなく主人公の好きなようにされている。

「【ゆっくりと甘い呼吸】はぁ……はぁ……はぁ……ぁぁっ……！
んっ、んっ、ぁっ……。
お姉ちゃん、もみもみ、んっ。すき。ぁっ、きもちぃよぉ……」

主人公、すばるが認めたのを機に、乳首をきゅうっとつまむ。
くいくい引っ張ったり、親指で転がしたり、かりかりと爪で優しく引っ掻いたりする。

「【とびきり甘く】ふみゃぁんっ……。
【困ったように】やぁだぁっ、おっぱいのさきっぽ、急に、ひっぱっちゃやだよぉ……。
ぁ、くいくいも、こねこねも、あっ。だめっ。ぁっ、あぁあっ……。
こねこね好き……。すばる、こねこねされるの、すごく、感じちゃうの……っ。
【観念して、快感をかみしめるように】はぅ……。お姉ちゃん、気持ちいいです……」

主人公、すばるが認めたので、顔を引き寄せてキスをする。

「んっ……ちゅぱっ。ちゅぱっ。ちゅっ……
【舌が入る】れろっ。くちゅ、くちゅ、ちゅるっ、ちゅっ……。
【嬉しそうに】あ、お姉ちゃんのベロ、あったかい……んっ。
れろっ。ちゅるっ、くちゅ、くちゅっ」

これまでは、いちゃいちゃしてもここでおしまい。これ以上には及んだことがない。
すばるは毎回もっとしてほしいと思っていたが、我慢していた。

「はぁ……はぁ……はぁ……もっと……。
【耐えかねたように】お姉ちゃん……。もっとして……。
今までは、ここでおしまいだったけどっ……。
おねがい。今日はしてください……。
すばるえっちな子になっちゃったの。もぉ我慢はやぁなの。
【懇願して】おねがいです、すばるにもっともっとさわってください。
すばるを、お姉ちゃんのものにしてください……っ」

主人公、すばるの頭を優しく撫で「ベッドに行こっか」と、肩を抱いてリビングからの移動を促す。

「【心底嬉しそうに】あっ……いいの……？
お姉ちゃん……嬉しい。うん、すばるのお部屋、いくっ」

ＳＥ：足音
ＳＥ：部屋のドアが開き、閉まる音
ＳＥ：部屋の明かりをつけるスイッチの音

SE：どさ、とベッドの上にすばるを座らせる音

主人公、ベッドに接する壁にすばるをもたれさせる。
すばる、逃げ場がなくなり、恥ずかしそうに主人公を見上げる。

「【顎を持ち上げられ、キスをされて】んっ……ちゅぷ……ちゅっ、ちゅっ、くちゅっ。
【舌を吸われ】んっ……！　ぁ、ちゅるっ、ちゅっ、くちゅっ……。
【うっとりと】お姉ちゃん……好き……大好き……。
うれしい……お姉ちゃん。
お姉ちゃんとすばる、これから、はじめてのえっちしちゃうんだね……。
お姉ちゃん……ありがとう。すばるのわがまま、聞いてくれて。大好き。
あのね、お姉ちゃん。今日はわたしのこと。
【恥ずかしそうに小声で】……好きなように、して、いいからね。
お姉ちゃんになら、どんなえっちなことされても、すばる、うれしいよ。
すばるの全部、お姉ちゃんにあげるから……。
可愛がってくれたら、うれしいな。
【甘くキスをして】ちゅっ。
へへ……キス、好き……。
ていうかそもそも、お姉ちゃんだったら、すばるにいやなこととかするわけないか……。
えへへ。
【嬉しそうに抱きつく】。信じてる。ぎゅーっ！」

SE：布をずり上げる音

主人公、再びすばるのおっぱいを触り始める。

「あっ……。んっ……やわらかい……？
お姉ちゃん……すばるのおっぱい好きだよね……。
結構、すぐ、さわるよね。
すばるも、お姉ちゃんにもみもみしてもらうの、すき……。
初めて触ってくれた日……お姉ちゃん、自分のおっぱいも触らせてくれたよね。
ぁっ。んっ……はぁ……はぁ……。
『私もすごくドキドキしてるよ』って……。
すばる、あれがすっごく嬉しかったの。
お姉ちゃんが、すばるの身体に触ってドキドキしてくれてる……。
興奮、してくれてるんだって。

お姉ちゃんは女の子で、すばるも女の子だから……。
それまでね、もしかしたら、お姉ちゃんは本当は男の人の方がいいのに。
すばるが、お姉ちゃんが大好きですって告白したから、仕方なく付き合ってくれてるのかなって思ったこともあったんだ……。
でもね、すごくドキドキ震えてるお姉ちゃんのおっぱいにさわったら。
『お姉ちゃんも緊張してるんだ。すばるの身体を見て、えっちな気持ちになってくれてるんだ』って思えて……。
すごく、安心したの。
大好きだよ、お姉ちゃん。
お姉ちゃんのためなら、すばる、なんでもできるよ。
できるっていうか……なんでも、してあげたいんだ。
ねぇ、お姉ちゃん……すばるもお姉ちゃんのおっぱいさわりたい。見せて……？」

【3．すばるからのいたずらなご奉仕】

主人公、笑顔で頷く。
すばる、たどたどしい手つきで主人公のブラウスのボタンを外し、ブラジャーをずり下げて乳首を露出させ、ぺろぺろと舐める。

ＳＥ：布がぱさ、と落ちる音

「よいしょ……。
えへへ、お姉ちゃんのおっぱいみーつけた。ふふ。
【感嘆して】きれい。まっしろ……。
すばるもお姉ちゃんのおっぱい、だーいすき。
へへへ、いただきますっ。
【舌先でちろちろと】ぺろ……ぴちゃっ、ぴちゃっ、ぴちゃっ。
ん……おいし……。お姉ちゃんの味だ……。
【乳首をくわえて】はむ……ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅうう……。
【無心で１０秒ほど吸い続けた後】んー？ 赤ちゃんみたい……？
うん、そうだよ。すばる、お姉ちゃんママの赤ちゃんなの。
ちゅぷっ、ちゅ、ちゅっ。
お姉ちゃんのおっぱい、たくさん飲みたいの。
うふふ、なでなでして……？
へへ、お姉ちゃんの手、好きー」

主人公「すばる、なんだか手つきがいやらしいよ」と恥ずかしそうに言う。
すばる、攻める側に回った実感が沸き、ちょっと調子に乗る。
主人公の胸を、主人公に見せつけるようにもてあそびはじめる。

「え？　『なんだか手つきがいやらしいよ』って？　……うん。そうだよ。
手つき、やらしいよ。大好きなお姉ちゃんのおっぱいもみもみしてるんだもん……。
やらしいことだけ、考えてるよ。
ほーら、こんな風に、むにゅってしたり。
お餅みたいに揉んだり……。
こうやってお指、おっぱいに、ぷにゅって沈めたり。
【からかうように笑う】きひひ、さっきの仕返し。
さきっぽ、きゅーんってつまんだりしちゃうよ。
あぁ、きもちいい？
あ！　そうだ……。ちゅぱっ。
こっちのおっぱいも、ちゅうちゅうしてあげるね。
ちゅっ……ちゅるっ……ちゅぷ、ちゅぷ。
反対側のおっぱいは……こうやって……。先っぽこねこねしちゃおっと。
【いたずらっぽく】どう？　あー、きもちぃ？
ふふふ。お姉ちゃんにこんなことしていいのは、この世ですばるだけなんだからね。
【ゆっくりと、意識していやらしい言い方をして】ねぇ。お姉ちゃんの乳首……つんと尖って、がちがちに硬くなってるよ？
エローい。
ほら……つまんだらね、こりこりって、するもん。
ぺろっ。れろっ、ぴちゃ、ぴちゃ……。
うれしいな……お姉ちゃん、すばるのお手々がきもちいいんだね。
あぁっ……。
お姉ちゃんえっちな顔してる……可愛い。
今、お背中、びくってしたよ？
可愛い……お姉ちゃん、すばるにお乳吸われて、乳首くにくにされて、感じちゃったんだね。
お目目うるうるさせて、顔もまっかだ。
ちゅうちゅうや、いしいじが気持ちいいんだぁ。
お姉ちゃんはお薬飲んでないのに、えっちになっちゃったんだね。
【からかうように】うわー、やらしい……。
きひひ。もっといたずらしちゃお。
ちゅっ。
【わざと大きく音を立てて】れろ……ちゅぱ、ちゅっ、ちゅううっ。

ふふふ。お姉ちゃん、お声可愛い……。
お姉ちゃんはきもちいいと、こんなえっちな声が出ちゃうんだね。
【強めに吸う】ちゅぷ、ちゅるっ。ちゅるるっ。
【乱れ始めた主人公を見て、愛おしそうな声で】うん。いっぱい鳴いて、あんあんお声出していいんだよ。
すばるにお乳おもちゃにされて、とろんとしてるしてるお姉ちゃん。すっごく可愛いよ。
【興奮気味に。ひとりごとのように早口で】ていうかえっちすぎ……。やばいよ。
お姉ちゃんの、エロ。こんな顔しちゃってさ。
こんなの、すばる以外の人にぜーったい見せちゃだめだよ。
ねぇねぇ。このまま、すばるにいたずらされちゃう？
【感動して】あぁ……。ここがいいんだぁ？　ふふ。すっごくすっごく、可愛いよ……。
大好き。すばるの前では、リラックスして、楽にしてていいんだからね。
……めちゃくちゃやらしく、なってほしいな。
【優しく、少し真面目な声で】どんなにえっちなお姉ちゃんでも、すばるは大好きなんだから、さ。
がまんとか、しないでね。
【わざとからかう声をあげ】あーっ！　またすごいえっちなお声出した……。
ししし。ほんと可愛い……。
こんなになっちゃったお姉ちゃん、どうしてあげちゃおっかなぁ？
……って、わぁっ！」

【4．お姉ちゃんからの、鏡の前でのえっち】

ＳＥ：ばさ！と布団に人が倒れる大きな音

主人公、攻められてとろんとしていたが、負けじとすばるを押し倒す。
両手ですばるの頬を包み、「もうゆるさないぞ」と、笑いながらすばるを本格的に攻め始める。

「あん……。
【キスされ】んっ、くちゅ、ちゅっ、ちゅっ。
もぉ、お姉ちゃんったら、すばるがしてあげようと思ったのに……。
あっ……！　さっきまで、おっぱいちゅぱちゅぱされて。
あっ、あんなに、んっ。感じてた。くせに……。
えっ？　お姉ちゃんはえっちだから、すばるに恥ずかしいお仕置きするって？
【恥ずかしい、という響きに明らかに期待している調子で、ごくんとつばを飲み込む】そん

な、だめだよぉ。
【困ったように】お姉ちゃんはー。すばるにっ、さっきみたくご奉仕されてるだけでいいのっ。
すばるにあんなこともこんなこともされて、とろとろになってるだけでいいんだよっ……？
すばるはさ、お姉ちゃんにしてもらうの大好きだけど、してあげるのだって、おんなじくらい大好きなんだから。
だから、お仕置きするのは、すばるだし……」

主人公、すばるの両手の指を絡ませてつなぎ、覆いかぶさって優しくキスをする。
主人公「私だって、ずっとすばるに触りたかったんだよ。私もご奉仕したい。すばるの色んなところにさわりたいな」と伝える。

「ぁん……。
【穏やかな、甘くゆっくりとしたキス】んっ、ちゅっ、ちゅっ、くちゅっ……。
【右耳をぺろぺろと舐められ、両手でおっぱいを揉みしだかれながら】んっ。あっ、くぅんっ……。
えっ……そうなの？　そ、そっか……。うれしいな。
お姉ちゃんも、すばるに触りたいって思ってくれてたんだ……。
【からかいつつもすごく幸せそうに】お姉ちゃん、エロだね。真面目なふりしてさ、本当はすばるですけべなこと、いっぱい考えてたんでしょう」

主人公「そうだよ」と認め、すばるの耳をぺろりと舐めた後「想像の中では、毎日すばるにいたずらしてたよ」など、すごくえっちな言葉を耳打ちする。

「【驚きつつ、興奮を隠しきれない様子で】えっ……！　あっ……、そっ、そんなことまで……？　『想像の中では、すばると毎日してた』とかっ……。
【非難するどころか、実際にしてみたくてたまらないという調子で】そんなっ、そんなことされたらっ、すばるきっと変になっちゃうよぉ。
【声が震えるほど嬉しそうに、きゃっきゃと】もーぉっ、やらしー。お姉ちゃんのどすけべ、変態さん！
でも。すごくうれしいな……。
そんなにすばるのこと、想ってくれてたんだね。
【笑いながら】ふふ。そうだよね、『えっちしない』とか言って、微妙にがまんできてなかったもんねー？
……いいよ、じゃあ、お姉ちゃんの好きにして。
ていうか、もぉっ、さっきからもみもみしすぎだしぃ……お姉ちゃんのおっぱい星人……。

【「すばるのおっぱいなら、いつまででも揉んでたいんだもん」と言われ】ずうっと揉んでられるとか……んっ、変態さんすぎるぞっ……。
はぅ……。お姉ちゃんのが、よっぽど。
【喘ぎ声をがまんして普通に話そうとしていたが、耐え切れなくなり】ぁっ。手つき、やらしいし……。
先っぽ、ぁっ、ころころしないでぇ……。ぁっ、つんつんもだぁめぇっ……。
んっ、んっ、あぁっ。
ていうか。お、お部屋も明るいし……このまま するんだったらさ、電気……消さない？
だめ？　え？　だって、すばるは恥ずかしいえっちが好きなんでしょうって……。
えっ？　なっ、なんで知って？
【しまった、また自分から認めてしまった、という調子で】あっ……！
ちがうの、お姉ちゃん。それはちがうのっ！」

主人公「先週すばるに漫画借りたとき、一緒に関係ないえっちな漫画が混じっていたよ。『恥ずかしいプレイが大好きなヒロインが、恋人といろんな場所でえっちする』お話だったから、すばるもそういうのが好きなんだと思ったの」と答える。

「えぇ！？　『先週すばるが貸してくれた漫画にえっちなのが混ざってた』？
『あぁいうのが……好きなんでしょ』って？
ちがうよぉ。それは、友達に借りた本だもん。
そんな漫画。すばるの好みなんかじゃないよ。
ちがうもん。ちがうっ……。
そんなの、興味ないもんっ」

主人公「私はあるよ。すばるの恥ずかしい姿に、すごく興味ある」と答え、すばるの身体をずらし、部屋の姿見に写る角度に変える。
鏡に、ワイシャツとセーターとブラをめくり上げられておっぱいを露出させられ、制服のスカートとハイソックスがずれたすばるの姿が写る。
すばるは顔を赤くしながらも一切抵抗せず、主人公はそれで、やはり恥ずかしいプレイが好きなのだと察する。

「もぉ、お姉ちゃん……。そ、そう。お姉ちゃんは興味あるんだ？
そうなんだ。ああいう……恥ずかしい、えっち。でも、すばるは……。
【『ないよ』と言いかけるが身体を鏡の方へ向けられ。明らかに興奮し、息が荒い。声が途切れ途切れになる】あぁっ……。いや……鏡の方なんか見ないもん……。
見、せないで……。こ、こんなの、恥ずかしい、よぉ。

【鏡に写るように乳首をつままれ】ぁ……あぁっ……また……くにくにするしぃっ……。やだぁっ……。恥ずかしいのなんか好きじゃないもん……。
【内心念願だったプレイをされ、喜びを隠しきれない声で】お姉ちゃんの、えっちっ。おっぱい大好き人間っ……。
【乳首を強めにつままれ、すごく感じた声で】あぁん……。んんうっ……。
はぁ……はぁ……はぁ……やらしいよぉ……。
お姉ちゃん……これやばいよぉ……。
【今度はパンツに手をかけられ、ひときわ驚いた声で】あっ……ぱんつ…だめぇ……」

主人公、鏡に写る角度ですばるのスカートに手を入れ、レースの可愛いパンツの中に手を入れる。
そのまま、くちゅり、とクリトリスに触る。とっくにとろとろに濡れている。

ＳＥ：ちゅぽ、という甘い水音

「はぅぅ……！　ぁっ」

ＳＥ：くちゅ、くちゅといういやらしい音が響く

「あぁっ……！お姉ちゃん……あぁんっ。
【びくびく震えながら、無意識に気持ちいい位置に指が当たるよう身体をくねらせる。ゆっくり呼吸しながら、声がだんだん甘くなっていく】はっ、ぁ。……んっ。んっ……んぅ……はあぁっ……。
【とうとうクリトリスを気持ちいい角度でさすってもらい、すごく感じた声で】あぁぁっ……！くぅぅ……。
ぁうっ……。あっ。ちがうもん……。すばるのあそこ……。とろとろじゃないもん……。
くぁぁっ、んっ。はっ……あぁっ……あぁあっ……。あっ……そこっ……」

すばる、主人公に左足の付け根を持たれ、足を軽く広げられる。
うっとりと感じているすばるの顔が、鏡に写る。
主人公、優しく頬や首にキスしながらクリトリスをさする。

「ひっ、ひぁっ、ぁっ。
お姉ちゃん……お姉ちゃぁんっ……。あぁっ……。すばる、こんなのはじめてっ……。
こんなのわかんないっ、おまた熱いのっ……。
ぁぁ、ぁっ、ぁっ、ぁ、ぁぁんっ。

【脇から主人公が顔を寄せ、キスをする】んっ……ちゅぱっ、くちゅっ。ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ。
あぁ……。お姉ちゃんっ」
主人公、一度愛撫をストップし、すばるの頭を優しく撫でる。
すばる、撫でられて安心する。甘えん坊になり、恥ずかしいえっちをするのが平気になる。

「ちゅっ。えへ……うんっ、大丈夫……。
ちゅ。平気だよ。ちょっと。びっくりしちゃっただけっ。
あのね、本当はね。お姉ちゃんに恥ずかしいことされてすごくうれしい……。
ごめんね……えっちになっちゃったすばる、可愛がってね。
【恥ずかしそうに】さっき言ってた、想像のすばるにしてたことみたいに……すばるのこと、めちゃめちゃにしても、いいよ？
お姉ちゃんになら何されても……すばる……きっと、うれしいから。
【「じゃあ、また触ってもいい？」と聞かれ】……ん。さわって。して？
【ゆっくりまたクリトリスへの愛撫が再開し】ひゃん……っ。あぁぁっ……」

主人公、すばるの反応から、一番感じるところを察する。
ゆっくりと、優しく往復するように、中指で時間をかけてすばるのクリトリスをいじる。

「はぁぁっ……。あぁぁん……。
【指でさすられる動きに合わせて喘いでしまう】あっ、あっ、あっ。
お姉ちゃぁっ……んっ。ぁ、なんで、ぁ、わかっちゃうっ、の……？あん……っ。
【くちゅり、と、一番感じるところをたっぷりいじめられ】あぁぁっ……！
【さえずるような、うっとりした声で】うんっ。そこが、気持ちいいの……。すばる、そこがすごく感じるの……。
あぁ……お姉ちゃん……お姉ちゃん……っ！
すばる、きもちぃいです……っ。
お姉ちゃんのっ、お指すりすり、気持ちいいの……。
【ゆっくり愛撫されているにもかかわらず、理性を失いはじめ】きもちぃ……すっごくっ……ぁぁっ。
すばる、かんじちゃうよぉ。
【さする角度が変わり、性器を軽く広げられ、びくっとして】ぁ、ひぁっ……ぁっ、そこ、はっ……！
だめぇ……ひろげないでぇっ……！
【溢れる愛液を、たっぷりクリトリスに塗りつけられ、快感のあまり嬌声を上げる。声がひ

ときわ高くなる】すばるのぬるぬる、よわいとこに塗っちゃだめぇ……。
あっ、ぁっ、ぁ、あぁんっ。
んぅっ……ぁ、きもちいっ……。
【ゆっくり、すばるの身体に負担の小さいようにいたずらされ、とうとうのぼりつめ】ひぁっ、ひぁぁぁん。
ぁっ、あぁぁん。あぁぁぁぁっ……！」

すばる、達してしまう。
がくがくと身体を震わせながら、主人公にぎゅっと抱きしめてもらい、ホッとした表情を見せる。
すばる、頭をなでなでされながら、主人公に甘える。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……。
えへ……お姉ちゃん……ありがとう……」

主人公「すばるのイっちゃうお顔、すっごく可愛かったよ」と言う。

「ええっ……？
【恥ずかしそうに】もぉ、またえっちなこと言うぅ……。『イっちゃうお顔可愛い』とかさあ……。
……うん、お姉ちゃんがすばるの気持ちぃところすぐわかってくれて、すばるの身体がラクなペースで、ゆっくりさわってくれたから……。すばる、じょうずにいくいく、できたよ。
【照れながら微笑み、満足した声で】ありがとう、お姉ちゃん。最高のはじめてだったよ……」

主人公「何を言ってるの？　私はまだまだ、すばるを可愛がりたいよ」と言い、額にキスする。
主人公「お洋服、全部脱いで？」とささやく。

「へっ？　まだしてくれるの……？
わ、わかったっ……。脱ぎ脱ぎ、するっ……」

【5．お姉ちゃんからの、ベッドの上でのえっち】

ＳＥ：もぞもぞと服を脱ぐ音

「あぁん……お姉ちゃん、そんなじろじろ見ないでぇ……。
脱ぐっ。ちゃんとお姉ちゃんに裸、みてもらうから……」

主人公、すばるの服を見て「しわしわになっちゃったね」と言う。

「うん？　お洋服、ぐしゃぐしゃって？　そうだよ？　もう、ワイシャツ、しわしわ！
おっぱいもみもみ大好き人間のお姉ちゃんが、すばるのお乳にいっぱいいたずらしたからでしょ……。
スカートももう、くたくた、だし。
【うれしさをこらえきれない調子で】全部の服にいっぱい、お姉ちゃんのにおいがするし……。
こんな制服で学校行ったら、えっちしてたの、ばれちゃうよ。
【クリーニングに出さないといけないね、と言われ】うん……でも、なんか洗うのもったいないね……。
【セーターについた、主人公の香水のにおいをかいで】ふふ、お姉ちゃんのにおいだぁ」

主人公、パンツと靴下だけの姿になったすばるの頬を包み、キスをする。

「ちゅっ。ふふ……もう少しで全部脱ぎ脱ぎ、できるよ。
裸、見せるのは、お付き合いしてからは初めてだね……。
【主人公に、パンツを脱ぐときは立ち上がって、自分の顔の前で脱いで欲しいと言われ】あっ……もーぉっ、やらしい！
お姉ちゃんもう、えっちすぎ……。『め、目の前でぱんつ脱いで』とか……。
わかった……わかったよぉ。立つ……から」

ＳＥ：ベッドの上に立ち上がる、ばさ、という音

「はい……。……こ、これでいい……？
これで見える……でしょ？
もお、お姉ちゃん、マジ変態……。
【困ったように、ひとりごとっぽく】こんなにむっつりすけべだなんて知らなかったよ……。
……すばると、一緒だね。
すばるたち、本当はお互いえっちなこと、いっぱい考えてたんだね。
じゃ、ぬ、ぬ……。
【覚悟を決めたように】脱ぐよ……？」

ＳＥ：パンツが床に落ちる音

「【小さな声で】ほら……脱いだよ……。
もう……すばる、お姉ちゃんにみんな見せちゃった……」

主人公、すばるの腰を抱き寄せると、おへそにちゅ、とくちづける。
お尻に手を回し、優しく撫でまわすと、ちゅぷ、と音を立てて性器を舐める。

「あっ……！　んっ、お姉ちゃんっ……。
お尻……だめっ……。
ふぇっ……？
お尻もずっと……もみもみしたかったの……？
【びくんと身をくねらせ】んっ、ベロ、あついよぉ。そんなに舐めたらあついの……。
クリさんあっつい……っ。んっ、ふうっ。あぁあっ……」

主人公、くちゅ、くちゅと音を立てて、静かにクリトリスを舐める。
じゅるじゅる、ぴちゃ、という音が響く中、すばるは足を震わせている。

「【じかにクリトリスを舐められ】はぅぁっ……。
あぁぁっ……すごいっ、そんなにっ……。
んっ、ふっ、んうっ。お姉ちゃんっ……そんなにすばるのここ、ぺろぺろしたかったの……？
あ……っ、くうんっ……。
へへ、いいよ。お、姉ちゃんの……したいだけ、して。
【甘く高い声で】お姉ちゃん、こんなにすばるとえっちしたかったんだね……。
すばる、すっごくうれしい……。
うんっ。とろとろ……だよ？
いっぱい溢れて……るよ。
【うっとりと】すばるのここがくちゅくちゅになるのはね……。
すばるが、お姉ちゃんのこと、大好きだからだよ。
大好きだから、こんなに、ぬるぬるにっ、んっ、なっちゃうの……。
【素直に、心から認めるように】あぁっ……。お姉ちゃん、クリさん。すっごく気持ちいいよ……。
お姉ちゃんに、ぁん、こんなに可愛がってもらって……すばるのクリさん、すっごく、すっごくよろこんでるよ……。
お姉ちゃんの好きなだけ、なめなめしてくれたら、うれしいな。
あぁっ。うっ。はぁぁっ……！

お姉ちゃん。
【甘く高い声で】そこ…されたら……。すばる、またっ……。
立ってられなく、なっちゃうっ、か、も。
はあぁっ……。
【懇願して】お、姉ちゃ……おねがい……むりぃっ……」

ＳＥ：ぱさ、とベッドに人が倒れる音

主人公、快感に耐え切れなくなったすばるを再び押し倒す。
両膝の裏側を持って、足を大きく広げさせる。

「あぁっ……これ、恥ずかしいよお……。
やぁだっ、そんなひろげないでぇ……。ほんとに……全部……見えちゃう……。
はう……見すぎ……だからあっ。
【再び舐め始められ】んっ、んっ、んんぅっ。
はぁ……はぁ……はぁ……。あっ、あの、お姉ちゃん……」

ＳＥ：じゅるじゅる、ぴちゃぴちゃと、性器を愛撫する音

「あっ、ふぁっ、ぁっ、くううぅんっ」

すばる、しばらく性器を愛撫され、１０秒ほどとめどなく喘ぎ続ける。
すばる『指を性器のなかに挿れてほしい』と言いたいが、恥ずかしくて言い出せない。
もじもじと下半身をくねらせながら、性器に顔を埋めている主人公を見つめる。

「ぁぁっ……。
あっ……あの……あの、ね……？
お姉ちゃん……ぁ、んっ、わたし、ね？　ぁっ、お姉ちゃんに……」

すばる、決意したように自分の性器を指さす。

「【少し間を置いてから、声を震わせて】お姉ちゃんに……。
【消え入りそうに小さく】……れて、ほしいです……。
お姉ちゃんの、お指、をっ……。
【小声で、早口で】すばるのなかにほしいの……。
は、じめて、だから……。お姉ちゃんに迷惑かけちゃうかもしれないけど。

すばるはしたいです……。全部、全部お姉ちゃんのものになりたい……。
【真剣な声で】すばるをもらってください……。
お姉ちゃんのお指、すばるのおまんこに入れてください……」

主人公、暖かく微笑み、身体を起こしてすばるを抱きしめる。
すばるの背中をさすりながら、「私も、すばるがほしい」と伝える。
すばる、嬉しさのあまり涙をこぼす。

ＳＥ：ぽんぽん、と優しく背中を叩く音

「【心から嬉しそうに】本当……？
【涙声になり】あっ……ごめんね……おかしいね。
まだしてないのに……ぐすっ、なんか……うれしくて涙出ちゃった……。
ひっく、小さい頃からずっと好きだった人と……やっと……って思ったら。
幸せで……ほんと……どうしよう？
【「大丈夫だよ。私も緊張してるから。ゆっくり、してみよう？」と言われ】ぐすっ、うん、
そうだよね。お願い……します？
【少しリラックスできたように】ふふっ、なんか改まっちゃったね……」

主人公、すばるをリラックスさせるため、すばるの頬に手を触れ、額や鼻、耳、唇に順にキスしていく。

「【リラックスさせようとする主人公の意図を察するように】あはっ。
ふふっ……くすぐったいよぉ……。んっ、ちゅっ。
【キスが深くなり】んっ……ちゅぷっ」

すばる、主人公に右手を取られ、主人公の胸に当てられる。
主人公がとてもドキドキしていることを知り、嬉しくなる。

「うん……？　お姉ちゃんの心臓……？　あ……。ほんとだ。すっごくドキドキしてる……。
あの時と、一緒だね。そっか……。うれしいな。
うん……もう、大丈夫。
【深呼吸し】すう……はぁ……。はぁ……いいよ……。
【優しく唇を重ねられ】ちゅっ……。すばるのなか、きて、ください」

主人公、すばるの足を広げさせ、人差し指一本だけをゆっくり挿入していく。

ＳＥ：ちゅぽ、と甘い音

「【歓喜と痛みが混じった声で】あぁぁ……っ！
【痛そう、苦しそうに】あ、ふ、くうっ……。はぁ……はぁ……はぁ……。
へ……き。痛く……んっ、ないよ。
【主人公に「つらかったらすぐに言うんだよ」と言われ】だいじょ、ぶ……つらく、ないよ。
あぁっ……。あ、のね、お姉ちゃんが入ってきたの……すごく、わか、るよ。
えへ……しあわせ……。
ぁっ……けっこう……お、奥まで入るんだね。
【痛みをこらえてゆっくりと呼吸する】うぅっ……！　はぁ……はぁ……はぁ……。
あ……やっと……全部？
【ようやく少し感じた声で】あっ……くぅっ！
くぅん……入っちゃった……。
うん……っ、ゆっくり、お願いします……。
【抽送されるリズムに合わせて声が出てしまう】はっ、ぁっ、ぁっ、ぁ。
ぁっ、あっ、ぁ、お姉ちゃぁん……」

すばる、挿入され、喘ぎ続ける。
すばる、主人公にそっと挿入する指の本数を増やされるが、気づかずだんだん異物感を許容できるようになり、感じるようになっていく。
鏡に、挿入されているすばるが写っている。

「あっ……お姉ちゃ……。
【心底嬉しそうに】見て……お姉ちゃんのお指が全部入ってるの。
【うれしそうに自分から足を広げ】すごいね……。はっきりわかる、ね。
すばる、お姉ちゃんのにされちゃってる……へへ、しあわせ……。
お姉ちゃんも、うれしい……？
きしし……すばるたち、おんなじ気持ちだね。
お姉ちゃん、ありがとう……すばる、今、生きてて一番幸せ。大好きだよ……。
【気持ちいい角度に入り】はぅっ、ぁ、うんっ。そこ……好き、みたい……。
んっ……！　ぁぁっ……。
あぁぁっ……。あっ、ぁっ、ぁ。
お姉ちゃん、気持ちいいよう。
【感じる場所を重点的に攻めてもらい】んっ、んっ、んぅ。はぁぁっ……。
ぁっ、ぁっ、ぁっ、ぁぁん。

はぁ……はぁ……はぁぁっ……。
お姉ちゃん……お姉ちゃぁぁんっ。
いいっ……いいの……きもちいいよ。
お姉ちゃん、すき、すきっ、大好きぃっ……！
【キスされて】ちゅっ……ぴちゃっ……くちゅっ……。
んっ……すばる……もおっ……！
【達してしまい】あぁぁぁぁんっ」

すばる、さっきよりも深く達する。
ぱた、とベッドに倒れ、寝ながら主人公に抱きしめられる。

「はぁ……はぁ……はぁ……。
えへ……また、いくいく、しちゃった……。
【もうだいぶ疲れているが、主人公を心配させまいと饒舌になり】お姉ちゃん……すごいね……。
ありがとう。すばる、初めてだったのに、ぜんぜん怖くなかったし、つらくなかったよ。
くふふ……すばる、オトナになっちゃった。
【主人公に「疲れてない？」と心配され。明らかにへとへとな声で】ん？　疲れてなーいよ！
平気、大丈夫だから。
【からかうように】なんなら、もっかいしちゃう……？
今度はお姉ちゃんにしてあげるよ。
次はすばるがお姉ちゃんのこと、かわいがってあげちゃうんだから！
【主人公に「もう。バカなこと言ってないで。寝ていいんだよ？」と言われ】だめぇ。寝ない……よ？
だってまだ……日付も変わってない、し。
お姉ちゃんと、まだまだお話しするの……。
ちゅっ。だって……今日は記念日だもん……。
お風呂も一緒に入るし、まだごちそう、残ってるし。
ふふっ。寝ない……もん……。
すぅ……すぅ……」

すばる、眠ってしまう。
主人公、裸で眠るすばるが風邪をひかないように毛布でくるむようにすると、そのままもう1枚布団をかける。
自分もパジャマに着替えて、添い寝する。

【6．おはよう！　これからもすばるとずっといっしょだよ】

翌朝。

ＳＥ：鳥のさえずる音

主人公、目覚める。
すると目の前で、すばるが主人公の寝顔を見つめているのに気づく。

「【うっとりと幸せそうに】おはよう……。お姉ちゃん。
朝だぞ。ちゅっ。
ふふ……おはようのちゅー、しちゃった。
【主人公の頭をなでなでしながら】たくさん寝たね……。昨日はぐっすりだったね……。
いい子、いい子。
【そのまま甘えるように抱きついて】ぎゅうぅーっ。
ねぇ。昨日、わたしが風邪ひかないように、毛布でくるんでくれたんだね、ありがとう。
お姉ちゃんは優しいなぁ……だぁいすき。
うん？　まだ寝てていいよ……。時間、たっぷりあるから。
えっ？　起きておしゃべりしたい？
ふふ……うれしいな。じゃあ、ご飯作るね。お姉ちゃんの好きなのにするからね。
今日も一日、がんばろーねっ」

すばる、ベッドから起き上がる。
主人公よりかなり早く目覚めていたらしく、もう服を着ている。

ＳＥ：ベッドから起き上がり、部屋を出る音ドアの開閉音

主人公、すばるにだけ用意させるのは悪いと思い、あわてて着替えてついていく。

「あれぇ？　寝てていいのに……手伝ってくれるの？
もぉ、お姉ちゃんのそういうとこ、ほんと、だーいすき！
じゃあ……ごめんね。昨日のごはんのお片づけ、してくれるかな？」

主人公「わかった」と答えると、例の「えっちになるお薬」を見つける。
それは怪しげな薬どころか、近所のスーパーにも売っているただのアルコール類だったので、それをすばるに告げる。

「【主人公に「えっちになるお薬」のボトルを見せられ、ばつが悪そうに】あ……。それが昨日の、えっちになるお薬の瓶だよ……。
へ？　お姉ちゃん、これ見たことあるの！？
【にこにこと、嬉しそうにからかいながら】うわー、さっすがどすけべ変態さんのお姉ちゃんだぁ。こんなのどこに売ってるの？
【教えてもらうが、何がおかしいのかわかっていない口調で】うん。これはただのアルコール。既製品。
そこのスーパーにも売ってる。
ぁ、そうなんだぁ。わたし全然知ら……えええっ！？
じゃぁ、すばるはただお酒に酔って、ああなっちゃったってこと……？」

主人公「そうだよ。つまりすばるも、どすけべ変態さんだね」と笑いかける。
すばる、真っ赤になってその場にうずくまる。

「【恥ずかしそうに】あぁぁ……そんなっ……やだーっ、どうしよう！？
うわぁ恥ずかしい……。
てっきりすばる、お薬で変になってるから、昨日はあんな色々、言えたんだって思ったのに……。うぅ……。
【観念したように】……うん。そうだよ……すばるはえっちな子ですっ。
はずみで言えたっていうのもあるけど……昨日のは全部……すばるがずっと、お姉ちゃんとしたくて夢見てたことなのっ。
お姉ちゃんに優しくかわいがってもらうのも、ちょっと意地悪にお姉ちゃんを攻めるのも、めちゃめちゃ恥ずかしいことしてもらうのも、だあいすき。
……だから、本音は、いつもあんな風にしたいの。
【泣きそうな声で】お姉ちゃん、こんなにえっちなすばるでも許してくれますか？」

主人公「もちろんだよ。昨日のすばる、すっごく可愛かったよ」と答える。
すばる、ぱぁぁっと表情が明るくなる。

「ほんと……？
【嬉しさをこらえきれず大きな声で】お姉ちゃん、だーいすき！！
うん。ずーっと一緒だよ。一生、お姉ちゃんのこと離さないよ。
【心底嬉しそうに】ねぇお姉ちゃん……ご飯終わったら……もう一回、しちゃう？
ふふっ。お姉ちゃん、大好き。ちゅっ！」

【終わり】